

夜のウォーキング感覚

赤瀬川原平

近藤啓太郎追悼

阿川弘之

あの夕陽の彼方へ

新井満

なかじきり

池内紀

「平安の気象予報士」

が見た空の色

石井和子

ウンコ座りに歴史あり

五木寛之

はれたそら

伊藤比呂美

「右大臣さま」との和解

岩倉具忠

一番争いはもうやめて

大庭みな子

太宰治の「裏」

長部日出雄

紅葉の名刺

尾崎左永子

草津の重監房

加賀乙彦

エコノミカル・カツ丼の午後

角田光代

ラ・マルセイエーズ

鹿島茂

リトルターンの物語

加藤幸子

サッカーW杯

もう一つの楽しみ

加部究

へへん。

川上弘美

批評の三十年

川西政明

遠い日のリラ

岸田今日子

おまけの人生

北杜夫

「宇宙の律」

木下順二

国境マニア

桐野夏生

「北の国から」

倉本聰

加齢と老化

黒井千次

産褥棟

小池昌代

老いの一徹

紅野敏郎

チロという猫

斎藤茂太

おとしだま

篠田桃紅

伯母N

清水邦夫

読書家と愛書家と書痴

清水徹

私心なき教授たち

城山三郎

仕事

新藤兼人

木蘭の花

杉本秀太郎

遠くなった戦争

高井有一

海辺の世界

高田宏

エノラ・ゲイ号機長

との対話

高橋昭博

春野菜

田辺聖子

断りなく名前をつけられて

長新太

伊藤信吉さんを悼む

司修

花祭りとバーミヤンの大仏

津島佑子

「志学の日」

ウソの効用を学ぶ

出久根達郎

光と影のスペイン

ドナルド・キーン

「郵便学」宣言！

内藤陽介

異界の声がする夏

中上紀

ベスト・エッセイ2003

花祭りとバーミヤンの大仏

日本文藝家協会編

編纂委員＝高田宏／津島佑子／増田みす子／三浦哲郎

光村図書

ベスト・エッセイ2003
花祭りとバーミヤンの大仏

日本文藝家協会編

編集委員＝高田宏／津島佑子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

光村図書

花祭りとバーミヤンの大仏

二〇〇三年六月三十日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二一九一

郵便番号一四一八六七五

電話〇三三四九三二二二一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2003 Printed in Japan

ISBN4-89528-227-9 C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ベスト・エッセイ2003

花祭りとバーミヤンの大仏

目次

三葉虫の眼

別役実 10

求む 踊り子

藤原正彦 14

「右大臣さま」との和解

岩倉具忠 18

はれたそら

伊藤比呂美 22

「北の国から」

倉本聰 25

国境マニア

桐野夏生 29

私心なき教授たち

城山三郎 33

リトルターンの物語

加藤幸子 38

丸の内・幻視空間

中村稔 43

「平安の氣象予報士」が見た空の色

石井和子 47

あの夕陽の彼方へ

新井満 51

龍の掌てを見に行く話

夢枕獏 58

夜のウォーキング感覚

赤瀬川原平 63

へへん。

老いの一徹

木櫛もっこくの花

《アンコボン》の棚

物語山撤退記

狂言の豊かな言葉は

海辺の世界

異界の声がする夏

近藤啓太郎追悼

ドナルドの郵便の力

権力者とゴシップ

チロという猫

春野菜

川上弘美 68

紅野敏郎 72

杉本秀太郎 77

堀江敏幸 82

南木佳士 86

馬場あき子 91

高田 宏 95

中上 紀 99

阿川弘之 104

平出 隆 108

野口武彦 113

斎藤茂太 117

田辺聖子 121

ウンコ座りに歴史あり

「志学の日」ウソの効用を学ぶ

エコノミカル・カツ井の午後

浅草裏

「郵便学」宣言！

変化

伊藤信吉さんを悼む

ラ・マルセイエーズ

おとしだま

草津の重監房

老子と猫

産褥棟

撥当たり

五木寛之

出久根達郎

角田光代

星川清司

内藤陽介

増田みず子

司 修

鹿島 茂

篠田桃紅

加賀乙彦

森本哲郎

小池昌代

藤沢 周

124

128

132

138

143

149

154

157

161

166

170

175

181

べそをかく

三浦哲郎

186

梅雨時の花

皆川博子

189

批評の三十年

川西政明

193

いやすな

吉田知子

198

落葉の日々

前登志夫

201

遠い日のリラ

岸田今日子

206

思想の危険

見田宗介

209

光と影のスペイン

ドナルド・キーン

213

紅葉の名刹

尾崎左永子

217

エノラ・ゲイ号機長との対話

高橋昭博

226

伯母N

清水邦夫

230

わたしの訳したババール

矢川澄子

235

太宰治の「妻」

長部日出雄

238

危険な話題

丸谷才一

242

サッカーW杯もう一つの楽しみ

加部 究

249

アイアムフウアイアム

なだいなだ

253

いつも涙を流しているよ。走りながら…

柳 美里

257

なかじきり

池内 紀

261

闇がなくて見えない

藤原智美

267

探査衛星からの信号

三 木 卓

271

子犬がきた八月

村田喜代子

277

《猫舌三昧》にも七分の理

柳瀬尚紀

281

加齢と老化

黒井千次

287

海亀塾とクレオール

宮内勝典

290

一番争いはもうやめて

大庭みな子

295

おまけの人生

北 杜 夫

300

遠くなつた戦争

重宝

断りなく名前をつけられて

夕映えの時間

“宇宙の律”

花祭りとバーミヤンの大仏

読書家と愛書家と書痴

仕事

高井有一

305

野中 柊

311

長新太

315

森 禮子

318

木下順二

322

津島佑子

326

清水 徹

331

新藤兼人

336

装帧 || 三村淳

ベスト・エッセイ2003

花祭りとバーミヤンの大仏

三葉虫の眼

別役 実

私の仕事机の抽出しの中に、小さな白いボール箱があり、開くと三葉虫の化石が二個入っている。私は抽出しを開けてその白い箱を見る度に、それをくれた人のことを思い出そうとするのだが、どうもはつきりしない。どこかで何かのパーティーがあった時、「これはあなた、これはあなた」と言いながら、周囲のものに何やら小さなものをプレゼントして歩いている人がおり、その人が私にも、箱に書かれた名前をちらと見て、「これはあなた」とそれを渡してくれたのである。

見ると箱の隅に、小さく鉛筆で私の名前が書いてあるから、そこまでの記憶は確かだと思ふのだが、それが誰だったかを思い出せないのである。もちろんそのパーティーが、どのようなものだったかも、忘れてしまっている。かなり他愛のない話であるし、三葉虫の化石にしても、さほど貴重なものではないと考え、あまり深くせんさくしなかったという

こともあるかもしれない。

今、再びこのことを思い出したのは、ほかでもない、或る日街を歩いていて本屋に立ち寄り、並んでいた『三葉虫の謎』（リチャード・フォーティ著、早川書房）という本を、ふと手にしてしまったからである。しかも読みはじめてみると、「私は、三葉虫が恐竜のもつすばらしい魅力のすべてをもち、その二倍の時間にわたって存続したことを示したいと願っている。読者に、世界を三葉虫の眼を通して眺め、何億年も昔へ旅するための助けにしてもらいたいのだ」と著者の言う通り、思いもかけない世界を垣間見せられたような気がしたので。

著者は、三葉虫研究における第一人者だそうであるが、研究書というよりはほとんどエッセイのように、多くの研究者のエピソードもまじえながら書いており、我々門外漢にも興味深く読ませてくれる。そして少なくとも三葉虫について、「単なる虫だと思って、馬鹿には出来ないぞ」と、座り直すくらいのはさせてくれるのである。

私も、そう思って座り直したところで、前述した白い箱のことを思い出し、久し振りに取り出して開けてみたというわけである。もちろん、もらった時にも開けて中を見ているのだが、「あ、三葉虫ね」と思ってそのまましまっていた。それを今度は、手に取ってしげしげと見たのであり、そこに貼られた小さな紙に、「ボリビア・ラパス産」「デボン紀（約四億年前）」と書かれているのを読みとることまでしたのである。ただ、小さな紙

はもう一枚あり、一方の化石のそれには「ノジュールに注目」、もう一方の化石のそれには「複眼に注目」と書いてある。

「ノジュール」というのが何かはわからないものの、「複眼」というのが昆虫などの持っている眼のことらしいということは、何とかわかる。「しかし」と、そこまで考えて私は少しく啞然とした。「これをくれた人は、私を三葉虫についての、かなりの専門家と思っているんだろうか」と。何故なら、当の化石の眼らしいところを見ても、そのどこに「注目」していいのか、専門家でない私にはさっぱりわからなかったからである。

ところで、「三葉虫の眼」というのは、特別のものであるらしい。紹介した著者の言葉の中に、「世界を三葉虫の眼を通して眺め」とあるが、これは決して比喩ではないのである。現に三葉虫は眼を持ち、それがどのようにして世界を見ていたかの研究も、化石だけを通じてどうしてそのようなことがわかるのかと思われるほど、詳細に行われているのである。生物における眼の発生は、ほぼ五億四千万年より前、ということになっているようであるが、その眼というもののありようの研究は、三葉虫からということらしい。

ということから考えると、この「複眼に注目」という送り主からのメッセージは、ことさら「複眼」であるということにこだわらず、その「四億年前に、この世界に向けて穿たれた眼に注目」ということかもしれない。化石の眼は、そこだけ厚ぼったくふくらんでい

て、一見すると閉じたまぶたのようにも見えるのであるが、それが眼球であってこちらに見開かれていたのだと考えると、或る感慨がないでもない。それを眼球として見直す手続きを必要とする分だけ、その眼が、単にその生体が生存していた当時の周辺だけでなく、四億年という時間をこえて、今日まで見通しているような気にさせられるのである。

「近視眼的にものを見る」という言い方があって、状況がめまぐるしく変転する今日にあっては、とかくそうなりがちであるから、これと対極をなす「三葉虫の眼で見る」という言い方が出来たら、いい教訓となると思われるが、いくら何でも「四億年」というのは、我々の理解をこえている、と言われるかもしれない。ただ、その化石を前にして、その「四億年」という時間のことを考えると、その眼で世界を見ることはおぼつかないものの、いくらか安らぐ気はするのである。

「それにしても」と、私は以来考えるのである。私にそのような効果をもたらそうとしてプレゼントしてくれたのだとしたら、それを理解するために私は、前述した著書を読むなりして、三葉虫についてかなり詳しくならなければいけないのであるから、送り主としては実に遠大な見通しをしていたことになるのである。「これはあなた」と言った声だけしか覚えていないのは、申しわけないと言いたいようがない。

求む 踊り子

藤原正彦

大学生の頃からよく旅に出た。新しい土地で新しい光や風に当たり、めずらしい人々のめずらしい言葉を聞くのが何より好きだった。小説や詩歌などに出てくる土地を、気ままに訪れるというのが多かった。

数学の研究をするようになってからは、問題が解けない時に出る旅が新しく加わった。問題が解けない時の数学者はつらい。一週間や二週間なら、四六時中一つの問題に集中してもほとんど苦労はない。次々に湧き出るアイデアを一つ一つ検証するのは、血湧き肉躍る仕事で、むしろ楽しい。

一カ月か二カ月しても相変わらずちがあかないと、少しずつつらくなる。肉体的に消耗してくる。実験や調査といった、身体を動かす作業の一切ないことが、精神に重くのしかかってくる。気が紛れないのである。アイデアが枯竭気味になってくると、ますますつ